

ひらかな使用頻度調査

— 言語教材製作の試み —

藤原 桂子

(久留米信愛女学院短期大学)

はじめに：

ここ数年来、モンテッソーリ教育法による言語教育に関する研究を継続しているが、モンテッソーリ教育法による言語の分野は、他の分野に比較して教具や教材が乏しいのではないかと感じている。したがって、教材研究を進め、望ましい教材を作成しなければならないという課題を抱えている。

1996年に、私学振興財団から研究助成金を得たのを機会に、それまでに製作してきた教具、教材(注1)が保育の現場で子どもたちによって、どのように使われ、何が問題かを調査した(注2)がやはり教材不足は否定できなかったように思った。

たとえば、次のような事がある。

絵本を読んで欲しいという子どもの欲求は、モンテッソーリ導入園に限らず一般に強く認められる。この欲求に応えることはとても大切で、絵本を繰り返し読んでもらった子どもは、自分でも読み出すことが少なからずある。また、文字は未だ書けないが、読める文字を使って、自分でことば(単語や文)を作りたいという欲求を持つ。「ことばあつめ」や「もじのシールはり」と呼ばれるものは、シール状になった文字を拾って紙に貼っていくもので、子どもにとっては楽しい言語活動の一つとなっている。「もじシール」は教師の手づくりである。その際、どの文字が子どもに多く使われるのか、また、各文字の必要量はどれ位なのか、その量を決めるのは教師の経験と勘に頼っているのが現状である。子どもの活動を円滑にするために過不足なく必要量を準備できればいいが……というのが現場の教師の願いである。子どもが必要とする教材を作りたいという理由から、絵本に使用されている「ひらかな」の使用頻度調査を考えてみた。ふだん保育室に置かれ、教師に何度も読んでもらったり、子ども自身が読んでいる絵本の中に、頻繁に出てくる文字は、子どもの聴覚や視覚を通して捉えられ子どもに親しまれる文字となる可能性があるのではないかと考えたのである。

研究目的：

音声言語から文字言語へと興味や関心を拡大しつつ

ある時期の子ども達の言語活動を円滑に行うため、また言語教材研究の一環として、保育室内に置かれ子ども達に親しまれている絵本を対象に、絵本に使われている「ひらかな」の使用頻度調査を行う。

調査方法：

保育室(縦割保育3～5才児混合)にふだん置かれている絵本の中より、①園児が親しみを感じて良く読んでいる本(園児自身が自分で選んでいるもの)を、②保育者に選んでもらった。③調査絵本数は48冊、④これらの絵本に使用されている「ひらかな」のすべてを使用頻度調査票に記入し集計した。⑤集計の際に「ひらかな」は「日本語の拍」の分類をもとに、

- i 清音(五十音図)を表す「ひらかな」(46)
 - ii 濁音・半濁音を表す「ひらかな」(25)
 - iii 拗音を表す「ひらかな」(36)とした。(合計107)
 - ⑤ 促音、特殊なもの、記号、カタカナは除いた。
 - ⑥ 長音は直音と区別せず1文字として数えた。(注3)
- (日本では、日本語を表すのに「かな」を用いる。原則的には1文字1拍を表す。ただし拗音は1拍が大小2文字で表される。日本語の拍の総数は111あり、その組合せですべての日本語が作られる。)(注4)

本調査では、ひらかなの使用頻度を示すと共に、使用された文字数を()内に数字で示した。ただし、拗音については()内に拍数を示した。

結果：

「ひらかな」の使用頻度とその割合を以下に述べる。

I 清音(五十音図、あ～ん 46文字)について

1) 「ひらかな」の使用頻度

①頻度最多のもの(1200回以上のもの) い、た、ん、し、ま(5文字)

②次に頻度の高いもの(800～1199回) か、う、とな、の、て、お、は、こ(9文字)

③中程度のもの(400～799回) あ、き、く、さ、す、ち、つ、に、も、ら、り、る、を(13文字)

④少量のもの(200～399回) え、け、そ、ね、ひ、みや、よ、れ、ろ、わ(11文字)

⑤最少のもの(～200回) せ、ぬ、ふ、へ、ほ、むめ、ゆ(8文字、このうち・印の文字は100回未満)

2) 使用頻度の割合

① 仮りに、使用頻度 800 回以上の文字を頻度の高いものとすれば 14 文字有り、清音全体の 30%

② 使用頻度 400～799 回を中程度とすれば 13 文字あり 28%

③ 400 回以下を使用頻度低いとすれば 19 文字あり清音全体の 41%

II 濁音・半濁音 (25 文字) について

1) ひらかなの使用頻度

① 最多 (200 回以上) が、だ、で、ど (4 文字)

② 中程度 (100～199 回) ぎ、ぐ、ご、じ、ず、ば、び、ぼ、ぱ (10) 文字

③ 最少 (100 回未満) げ、ざ、ぜ、ぞ、ち、ず、び、ぶ、べ、ぽ (11 文字)

2) 使用頻度の割合

① 最多のものは、濁音・半濁音全体の 18%

② 中程度のものは、濁音・半濁音全体の 40%

③ 最少のものは、濁音・半濁音全体の 46%

III 拗音 (36) について

1) ひらかなの使用頻度

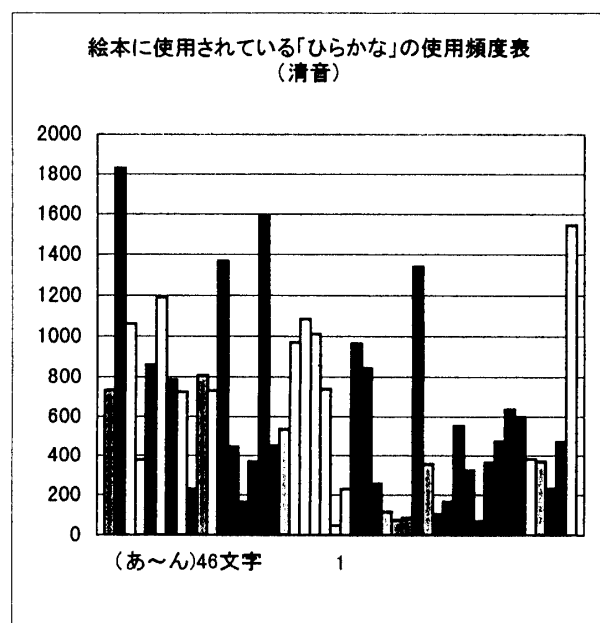
① 最多 (160 回以上) ちゃ (1)

② 次点 (60～70 回) しょ (1)

③ 中程度 (20～59 回) しゃ、しゅ、ちゅ、ちゅ、じゅ、じょ ぴょ (8)

④ 最少 (1～19 回) きゃ、きゅ、きょ、にゃ、にゅ、によ、ひゃ、ひょ、りゃ、りゅ、りょ、ぎゅ、ぎょ ちゃ、びゅ、びょ、びゅ (17)

⑤ なし (0 回) ひゅ、みゃ、みゅ、みょ、ぎゃ、ぢゅ、ぢょ、びゃ、びゅ (9)



2) 使用頻度の割合

① 最多のものは拗音全体の 4%、次点 4%

最多と次点を併せても拗音全体の 8%である。

② 中程度のものは拗音全体の 22%

③ 最少のものは拗音全体の 47%

④ 使用されなかったもの (0) は拗音全体の 25%

最少と零を併せると 72%になる

考察:

1) 以上のことから絵本には使用頻度の高い「ひらかな」とそうでないものがあり、それらの文字がどの程度の割合を占めるものが明らかになった。使用頻度の高い文字が言語活動において幼児の欲求する文字と一致するものでないとしても「もじシール」などの教材製作の際に、必要な文字の種類と量を割出すのに有効と考えられる。(もじシール作成の資料となる)

2) 絵本が幼児の言語発達に有効なものであるなら、絵本で使用頻度の高い文字は、幼児の視覚、聴覚に捉えられる機会も多くなり、頻度の少ないものよりは親しまれる機会が多くなると考えられる。

3) 絵本の選択について、今回は、保育者に一任した。調査対象とする絵本を今後選ぶ際には、さまざまな角度から検討すれば、今回と異なる結果が得られるかも知れないと考えている。

4) 絵本を構成する要素は、きわめて複雑多岐にわたる。絵本の文体もまた構成要素と深く関わるものであろう。絵本の構成要素や文体が、「ひらかな」の使用頻度に影響するであろうことは十分に予想される。

5) 調査対象とした「ひらかな」は、清音、濁音・半濁音、拗音を含み、日本語を構成する拍の全体数に近い。音声言語から文字言語への過渡期に直面する幼児には発音上の困難もあれば、音声記号と文字記号の一致、発音と表記のずれ、など多くの困難がある。使用頻度の低い文字、まったく使用しなかった文字と、子どもの出会う困難とは関係があるのだろうか。「ひらかな」使用頻度調査の結果は、多くの課題を内在していることを感じさせるものである。

むすび:

今回の調査は、言語教材「もじシール」製作にあたって有効な資料であることが分かった。更に、幼児の言語発達過程での困難点の解明、教材研究への示唆も得られた。同時にこれらは今後の課題ともなった。

注1: 久留米信愛女学院短大紀要 NO16 (1993) 注2: 同紀要 NO19 (1996) 注3: 日本保育学会第42回大会研究論文集モンテッソーリ教育法による言語教育3、注4: 金田一春彦「共通語のアクセント」の中より「拍とは」日本語アクセント辞典